

靈枢講義 2021年2月14日

『靈枢』九鍼十二原篇 第1段 146字

小鍼之要、易陳而難入、粗守形、上守神、神乎神、客在門、未覩其疾、惡知其原、刺之微、在速遲、粗守閑、上守機、機之動、不離其空、空中之機、清靜而微、其來不可逢、其往不可追、知機之道者、不可掛以髮、不知機道、叩之不發、知其往來、要與之期、粗之闇乎、妙哉工独有之、往者為逆、來者為順、明知逆順、正行無問、迎而奪之、惡得無虛、追而濟之、惡得無實、迎之隨之、以意和之、鍼道畢矣、

【第1節】 テーマ：神

小鍼之要、易陳而難入、粗守形、上守神、  
神乎神、客在門、未覩其疾、惡知其原、

【第2節】 テーマ：機

刺之微、在速遲、粗守閑、上守機、  
機之動、不離其空、空中之機、清靜而微、  
其來不可逢、其往不可追、  
知機之道者、不可掛以髮、  
不知機道、叩之不發、

【第3節】 テーマ：逆順往來

知其往來、要與之期、粗之闇乎、妙哉工独有之、  
往者為逆、來者為順、  
明知逆順、正行無問、  
迎而奪之、惡得無虛、  
追而濟之、惡得無實、  
迎之隨之、以意和之、  
鍼道畢矣、

【 4 字句の例】

『素問』天元紀大論

推而次之、令有條理、  
簡而不匱、久而不絕、  
易用難忘、爲之綱紀、  
至數之要、願盡聞之、

故其始也、  
有余而往、不足隨之、  
不足而往、有余從之、  
知迎知隨、氣可與期、

至數之機、迫迕以微、  
其來可見、其往可追、  
敬之者昌、慢之者亡、  
無道行私、必得天殃、  
謹奉天道、請言眞要

『素問』刺眞要大論

故大要曰、  
謹守病機、各司其屬、  
有者求之、無者求之、  
盛者責之、虛者責之、  
必先五勝、疏其血氣、  
令其調達、而致和平、  
此之謂也、

【第1節】

小鍼之要、（小鍼の要は、）

易陳而難入、（陳べ易くして入り難し。）

粗守形、上守神、（粗は形を守り、上は神を守る。）

神乎神、客在門、（神なるかな神、客、門に在り。）

未覩其疾、惡知其原、（未だ其の疾を<sup>み</sup>覩ず、惡んぞ其の原を知らん。）

【第2節】

刺之微、在速遲、（刺の微は、速遲に在り。）

粗守関、上守機、（粗は関を守り、上は機を守る。）

機之動、不離其空、（機の動は、其の空を離れず。）

空中之機、清静而微、（空中と機とは、清静にして微なり。）

其来不可逢、（其の来は逢うべからず。）

其往不可追、（其の往は追うべからず。）

知機之道者、不可掛以髮、（機の道を知る者は、掛くるに髮を以てすべからず。）

不知機道、叩之不発、（機の道を知らざるは、之を<sup>ひ</sup>叩きて発せず。）

【第3節】

知其往来、要与之期、（其の往来を知るを、<sup>かひ</sup>要らず之が<sup>な</sup>期と与せ。）

粗之闇乎、妙哉工独有之、（其の闇きか。妙なる工 独り之を有す。）

往者為逆、来者為順、（往は逆と為し、来は順と為す。）

明知逆順、正行無問、（明らかに逆順を知り、正しく行い、問うなかれ。）

迎而奪之、惡得無虚、（<sup>げい</sup>迎して之を奪う。惡んぞ虚無きを得んや。）

追而濟之、惡得無實、（<sup>つい</sup>追して之を<sup>すく</sup>濟う。惡んぞ実無きを得んや。）

迎之随之、以意和之、（之を迎し、之に随するは、意を以て之を和せ。）

鍼道畢矣、（鍼道 畢んぬ。）

## 九鍼十二原篇第 1 段

はり師が「急性熱病」を対処するときには備えるべき能力

### 【第 1 節】

粗守形、上守神、（粗は形を守り、上は神を守る。）

### 【第 2 節】

粗守関、上守機、（粗は関を守り、上は機を守る。）

### 【第 3 節】

粗之闇乎、妙哉工独有之、（其の闇きか。妙なる工 独り之を有す。）

（ 1 ）急性熱病に対する要諦をのべている

- ①神（研ぎ澄まされた精神、集中した意識）：病気の徴候を察する（先手の治療）
- ②機（タイミング）：治療のタイミングが分かる（臨機応変）
- ③逆順（予後の善し悪し）：急性熱病に逆証・順証があるのを心得ている

（ 2 ）急性熱病と九鍼

#### ①『素問』刺瘡篇

（中鍼・五鍼、鉞鍼）

瘡脉満大急、刺背俞、用中鍼、傍伍、肘俞各一、適肥瘦出其血也、

瘡脉小實急、灸脛少陰、刺指井、瘡脉満大急、刺背俞、用五、肘俞背俞各一、適行至於血也、

（鑱鍼）

筋痠痛甚、按之不可、名曰附髓病、以鑱鍼、鍼絶骨、出血立已、

（鋒鍼）

諸瘡而脉不見、刺十指間出血、血去必已、先視身之赤如小豆者、盡取之、

不已、刺舌下兩脉出血、不已、刺郄中盛經出血、又刺項已下俠脊者、必已、舌下兩脉者、廉泉也、

先頭痛及重者、先刺頭上及兩額兩眉間出血、

先項背痛者、先刺之、先腰脊痛者、先刺郄中出血、

先手臂痛者、先刺手少陰陽明十指間、

先足脛痠痛者、先刺足陽明十指間出血、

風瘡、瘡發則汗出惡風、刺三陽經背俞之血者、

②『靈枢』熱病篇

(第一鍼：鑱鍼、第六鍼：円利鍼、第四鍼：鋒鍼、第三鍼：鍉鍼、)  
 熱病、先膚痛、窒鼻充面、取之皮、以第一鍼、五十九、  
 熱病、先身瀆倚而熱、煩悒、乾脣口噙、取之皮、以第一鍼、五十九、  
 熱病、噙乾多飲、善驚、臥不能起、取之膚肉、以第六鍼、五十九、  
 熱病、面青、腦痛、手足躁、取之筋間、以第四鍼于四逆、  
 熱病、數驚、瘈瘲而狂、取之脉、以第四鍼、急寫有余者、  
 熱病、身重骨痛、耳聾而好瞑、取之骨、以第四鍼、五十九刺、  
 熱病、頭痛、顛顛目痠、脉痛、善衄、厥熱病也、取之以第三鍼、視有余不足、  
 熱病、體重、腸中熱、取之以第四鍼於其腧、及下諸指間、  
 熱病、挾臍急痛、胸脇滿、取之湧泉与陰陵泉、取以第四鍼、鍼噓裏、

(3) 熱病の4期

『靈枢』逆順篇

「上工刺其未生者也、其次刺其未盛者也、其次刺其已衰者也、下工刺其方襲者也、与其形之盛者也、与其病之与脉相逆者也、」

【未病】

(未生期) 上工刺其未生者也、⇒潜伏期間

【已病】

(未盛期) 其次刺其未盛者也、⇒症状が出始めた時期

(方襲期) 下工刺其方襲者也、与其形之盛者也、与其病之与脉相逆者也、⇒病勢盛んな時期

(已衰期) 其次刺其已衰者也、⇒病勢が衰えた時期 (緩解期)

未病・已病	4期	往期・来期	治療家		逆順・迎隨
未病期	未生期		上工	潜伏段階で発見治療	
已病期	未盛期	来期	中工	症状が出てから治療	順証 迎法をする
	方襲期		最下工	病勢が強くなってから治療 失敗する可能性が大	
	已衰期	往期	下工	緩解期の治療。 ぶり返すので慎重に。 深追いはしない	逆証 隨法をする

【関連文章】

『靈樞』官能篇「上工之取氣、乃救其萌芽。下工守其已成、因敗其形。」

上工之取氣、乃救其萌芽 ⇒ 未生期の治療

下工守其已成、因敗其形 ⇒ 方襲期の治療

『素問』刺熱篇「病雖未發、見赤色者刺之、名曰治未病」

病雖未發、⇒ 未生期の治療

【4期と九針十二原篇】

⇒ 未病期（未生期）の早期発見には「神」力が必要

⇒ 已病期の治療は、「機」（タイミング）が重要

⇒ 已病期には、予後良（順証）・予後悪（逆証）の区別がある

【迎法・随法】

①旧迎随 【第1段】の九鍼を使った迎随

「邪を排除する」ことを目的に、

迎法：迎撃法（熱邪・大邪を取り除く）

随法：追撃法（寒邪・小邪を取り除く）

（参考）

『靈樞』刺節真邪篇「五邪刺」

**迎法**：癰邪・熱邪・大邪

（鑱鍼）凡刺熱邪、越而蒼、出遊不歸、乃無病、爲開通、**辟門戶**、**使邪得出**、病乃已、

（鈹鍼）凡刺大邪、日以小、**泄奪其有**余、乃益虛、剽其通、鍼其邪、肌肉親視之、母有反其眞、刺諸陽分肉間、

**随法**：寒邪・小邪

（員利鍼）凡刺小邪、日以大、**補其不足**、乃無害、視其所在、迎之界、遠近盡至、其不得外、侵而行之、乃自費、

刺分肉間、

（毫鍼）凡刺寒邪、**日以温**、**徐往徐來**、致其神、門戶已閉、氣不分、虛實得調、其氣存也、

②新迎随 【第2段】の毫鍼を使った迎随

迎法：写法（邪気の写法）⇒速刺徐抜・鍼孔を閉じない

随法：補法（眞気の補法）⇒徐刺速抜・鍼孔を閉じる

【第1節】

小鍼之要、

(小鍼の要は、)

(小鍼を使う上で大切なことは、)

【小鍼】

①微鍼と同義。九鍼のこと。

②小さい鍼。毫鍼。

『靈樞』厥病篇

「腸中有蟲瘕及蛟蝟、皆不可取以小鍼。」

(腸中に蟲瘕及び蛟蝟有らば、皆な取るに小鍼を以うべからず。)

(腸の中に蟲瘕や蛟蝟があれば、小さい鍼では治療してはいけない。)

③「小」は謙称。「私どもの鍼のやり方の要点は、説明しやすいのです。」

易陳而難入、

(陳べ易くして入り難し。)

(説明することはたやすいが、身につけることは難しい。)

小鍼の使い方を説明することは簡単だが、小鍼の運用で大事な「神」を身につけることは難しい(身につけば「入神の技」という)。

粗守形、

(粗は形を守り、)

(粗工は、形を固守する。)

粗工は、症状を固守すること(症状が出るまで待っていること)。形は、ここでは病形・症状。

\* 『靈樞』官能篇

「下工守其已成、因敗其形。」

(下工の其の已に成るを守るや、因りて其の形を敗る。)

(下工は症状が出るのを待つから、なので体は損なわれる。)

\* 『素問』八正神明論

「形乎形、目冥冥、問其所病、索之於經、慧然在前、按之不得、不知其情、故曰形、」

(形なるかな形。目冥冥とするも、其の病む所を問い、之を經に索むれば、慧然として前に在り。之を按ずれども得ず、其の情を知らざる。故に形と曰う。)

(形の技である、症状にこだわっているのは。良く見えなくても、症状を聞いて、実際に触診すれば、眼前にはっきりとわかる。これが形である。触診して分からなければ、病気の状態がわからない。これも形でもある。)

上守神、

(上は神を守る。)

(上工は神を保ち守る。)

上工は「神」の状態を保ち維持している。神は、「研ぎ澄まされた精神、集中した意識」である。研ぎ澄まされた精神で病気の兆候を察知することを「神」といい、また察知できる人を神という。第3節の「妙なる」も、神業に近い、巧みなさま。「神」は、精神・意識。

\* 第2段

①「神在秋毫、属意病者、」

(神は秋毫にあり、意を病者に属げ。)

(精神を微細に研ぎ澄まし、意識を集中させて病者に注げ。)、

②「神属勿去、知病存亡、」

(神は属ぎて去る勿れ、病の存亡を知る。)

(精神を集中して病者に注ぎ、目を離してはならない。病気の存亡を知るためなのだ。)

\* 『素問』宝命全形論

「神無營於衆物。」

(神は衆物に營さるるなかれ。)

(精神は周りのモノに乱されてはならない。)

神乎神、

(神なるかな神。)

(神のような人だ、研ぎ澄ました精神の持ち主は。)

\* 『易』繫辞伝

「知幾、其神乎。」

(幾を知るは、其れ神か。)

(兆しを知るのは、神のような人だ。)

\* 『淮南子』精神訓

「神則、以視無不見、以聽無不聞、以為無不成也。是故憂患不能入也、而邪氣不能襲。」

(神なれば則ち、視るを以て見ざる無し、聴くを以て聞かざるなし、為すを以て成らざるざし。是の故に、憂患は入る能わざるなり、而して邪氣は襲う能わず。)

(神であれば、視ても見えないものはなく、聴いても聞こえないものはなく、為しても成らないものはない。神であるので、憂い患いが入り込む余地はなく、邪氣も襲う余地が無い。)

\* 『素問』八正神明論

「神乎神、耳不聞、目明、心開而志先、慧然獨悟、口弗能言、俱視獨見、適若昏昭然獨明、若風吹雲、故曰神。」

(神なるかな神、耳聞かざるも、目明らかにして、心開けて志先<sup>あら</sup>わるれば、慧然として独り悟り、口言う能わず。俱に視て、独り見、適<sup>まさ</sup>に昏<sup>くれ</sup>に昭然として独り明らかなるが若し。風の雲を吹くが若し。故に神と曰う。)

(神の技である、神を守るのは。耳から情報は入ってこなくても、視力がすぐれ、心が開けて、心が洗われていれば、はっきりと独りだけわかる。口では説明できない。皆で視ても、独りだけ見える。それは暗がりの中にそこだけぱっと明るいように。あるいは風が雲を吹き飛ばしたように。これを神という。)

客在門、未覩其疾、惡知其原、

(客、門に在り、未だ其の疾<sup>み</sup>を覩<sup>み</sup>ずして、惡<sup>いず</sup>くにか其の原を知らん。)

(潜伏期間で、病症が出ていなのに、どのようにして病気のはじまりを知ったのだろうか。)

神の人は、外邪が侵入して、症状が出ていないのに、どのようにして病気の原因(はじまり)を探ることができたのだろうか。それは、研ぎ澄ました精神の持ち主だからであり、原穴を探って(偵察して)五蔵の病気を見つけることができたのだ。

\* 客は外邪。門は入り口。外邪が門に入り込む。病期でいえば潜伏期間。覩は偵察する。原は五蔵の病気の源(はじまり)を探る原穴。

\* 第8段

「五藏有疾也、應出十二原」

(五蔵に疾あるや、応は十二原に出づ。)

(五蔵に疾が有れば、手応えが、十二の原穴に現れる。)

「明知其原、觀其應而知五藏之害矣」

(其の原を明知するは、其の応を觀て、五藏の害を知ればなり。)

(原穴をはっきりと知ることができるのは、その手応えをうかがって、五藏の害を知るから。)

\* 『靈樞』官能篇

「上工之取氣、乃救其萌芽。」

(上工の氣を取るや、乃ち其の萌芽を救う。)

(上工は邪氣を察して、病氣の萌芽の段階で治す。)

【第2節】

刺之微、在速遲、

(刺の微は、速遲に在り。)

(鍼刺の微妙さは、素早さにある。)

第2節から「機」(治療のタイミング)を話題にしているので、已病期を前提としている。「上は機を守る」(上工はタイミングよく治療する)からすれば、判断・行動の素早さ、迷いが無いことを言う。後文の「不可掛以髮」(間に髪を容れない)に通じる。つまり、速遲は、偏義複詞で、速に意味がある。

粗守関、

(粗は関を守る。)

(粗工は関を固守する。)

\* 粗工は、四関にある原穴にこだわる(守)。已病期は治療のタイミングが大事なのに、粗工はまだ、原穴で五藏の病氣の始まり(潜伏期)を見ている。そんな場合ではないのだ。

\* 第8段

「十二原出於四関。」

(十二原は、四関に出づ。)

(十二原穴は、四関にあらわれている。)

\* 『靈樞』官能篇

「工之用鍼也、知氣之所在而守其門戸」

(工の鍼を用いるや、氣の所在を知りて、其の門戸を守る。)

(工の鍼治は、邪気の所在を知って、門戸を必死に守ろうとする。)

上守機、

(上は機を守る。)

(上工は機を保ち守る。)

上工は、治療のタイミングをよく知っている。「守」は、保ち守ること。「機」は、物事をするのに適したころあい。

機之動、不離其空、

(機の動は、其の空を離れず。)

(ころあいよく動くには、空虚な心と切り離せない。)

\* 「機之動」は「機動」に同じ。物事をするのに適したころあいに応じて素早く行動・適応するさま。

\* 「空」は心が空虚であること。つぎの「清静而微」と同じ。

\* 『素問』八正神明論「**心開而志先**」(心開きて志<sup>あら</sup>先わる)に通じる。

空中之機、清静而微、

(空中の機は、清静にして微<sup>かす</sup>かなり。)

(空虚な心で、機を活かすには、清静な心で、精緻さがもとめられる。)

空虚な心で、状況に応じて素早く行動・適応するには、心がすっきりして静かで落ち着いていなければならないし、精緻な判断が必要である。(心が騒がしいと、ころあいがわからない。)

空中——清静＝空虚で清静の心

機——微＝機は微妙

\* 『老子』16章

「致虚極、守静篤」

(虚極を致し、静篤を守る。)

(己の心をどこまでも虚しくし、あくまで静けさを守っていく。)

其来不可逢、其往不可追、

(其の来は逢うべからず、其の往は追うべからず。)

(病気が盛んな「来」は、軽々しく迎え撃ってはならない。病気が治りかけの「往」は、むやみに追い撃ってはならない。)

\* この句（其来不可逢、其往不可追）に「来」「往」とあるので、往来をテーマにしている第3節に有るべきか。

\* 其来不可逢：「来」は、ここでは方襲期のことをいう。病勢が盛んであるときは、輕易に迎え撃ってはいけない。

4 期	第 2 節	第 3 節
未生期		
未盛期		来期（来為順）
方襲期	来期（其来不可逢）	
已衰期	往期（其往不可追）	往期（往為逆）

\* 『素問』 離合真邪論

「無逢其衝而寫之。」

（其の衝<sup>むかう</sup>を逢<sup>むか</sup>えて之を写すなかれ）

（その向かってくるのは、迎法をして瀉してはならない。）

\* 「逢」は仮字で、本字は「迎」。

\* 「往」は已衰期のことをいい、病勢が過ぎ去るの意。病勢が衰え始めているのは深追いしてはならない。

『素問』 陰陽應象大論篇

「其盛可待衰而已。」

（其の盛んなるは、衰うを待ちて已やすべし。）

（その盛んな状態は、衰えるのを待つてから、治療したほうが良い。）

\* 『素問』 離合真邪論

「候邪不審、大氣已過、寫之則眞氣脱、脱則不復、邪氣復至、而病益蓄、故曰、其往不可追、此之謂也。」

（邪を候<sup>うかが</sup>うに審<sup>つまび</sup>らかならずして、大氣已に過ぐるに、之を写すれば則ち眞氣脱し、脱すれば則ち復せず、邪氣復び至りて、病益ます蓄む。故に「其往不可追」と曰う。此れを之れ謂うなり。）

（邪の観察が不十分で、方襲期を過ぎて已衰期に入って、そこで瀉法すれば眞氣がぬけて回復しない。よって邪氣が再興して病氣は一層重くなる。このことを「其往不可追」という。）

\* 「迎」は、迎うように手当てすること（迎撃）。「追」は、後から救済すること（追撃）。以上のことから、「迎」・「追」が本字。この文章の「其来不可逢」の「逢」は仮字で、迎が本字。第2段「補曰随之」、『難経』七十九難「随而济之者、補其母也」の「随」は仮字で、「追」が本字。

#### 【往・来の用例】

\* 『莊子』人間世篇は「來世不可待，往世不可追也」（来世は待つてはならない。往世は追つてはならない）

『呂氏春秋』聽言「往者不可及、來者不可待」（過去は追つてはならない、将来は待つてはならない）

『莊子』山木篇「其送往而迎來、來者勿禁、往者勿止」（往くは自然にまかせ、妄りにとどめてはならない）

『孟子』盡心下にも「往者不追、來者不拒、」（来るも去るも自由に任せる）

『論語』微子篇「往者不可諫、來者猶可追」（過去はどうにもならないが、将来はどうとでもできる）。

知機之道者、不可掛以髮、

（機の道を知る者は、掛くるに髪を以てすべからず。）

（機道を知っている者は、素早く行動でき、間に髪を入れない。）

\* 機道（物事をするのに適したころあいに応じて素早く行動・適応するさま）を知っている者は、間に髪をいれない行動ができる。

\* 「掛」は、気にかかる、心がひかれる。機かどうかを気につけ、即座に機を判断できること。

#### \* 『素問』離合真邪論

「不可挂以髮者、待邪之至時、而発鍼寫矣、若先若後者、血氣已盡、其病不可下、故曰、知其可取、如発機、不知其取、如扣椎、故曰機道者、不可挂以髮、不知機者、扣之不発、此之謂也。」

（「不可挂以髮」とは、邪の至る時を待ちて、鍼を発して寫すなり。「若先若後」とは、血氣已に盡くれば、其の病 下すべからず。故に曰く、其の取るべきを知るは機を発するが如し、其の取るを知らざるは、椎を扣くが如し。故に「機道者、不可挂以髮、不知機者、扣之不発」と曰う。此れを之れ謂う也。）

（「不可挂以髮」とは、邪氣が来るのを待ち、来るやいなや鍼を発して瀉法すること。「若先若後」とは、血氣が尽きてしまって、病氣を攻め落とすことはできないこと。ゆえに機を発するよう

に治療すべき時を知り、椎を叩く（？）ように治療すべき時が分からない、これを「機道者、不可挂以髮、不知機者、叩之不発」という。）

不知機道、叩之不発、

（機の道を知らざるは、之を叩ひきて発せず。）

（機道を知らない者は、手控えてしまい、行動できない。）

\* 「叩」は、控の意。手控えること。「不発」は、行動できないこと。ころあいが分からない者は、躊躇し迷い、素早く行動して適応することができない。

### 【第3節】

知其往来、要与之期、

（其の往・来を知り、要かならず之が期なを与せ。）

（病気の往・来の経過を知って、いつでも期の判断をせよ。）

\* 往・来とは、往期・来期のこと。第3節では、来期は未盛期、往期は已衰期。

\* 「期」は、治る時期・死亡する時期。『史記』倉公伝に「決在急期」（急ぎだと判断した）、「死期有日」（死亡の時期は日にちが決まっている）、「安穀者過期、不安穀者不及期」（穀物に満足する人は死期を超え、穀物に不満な人は死期に未満となる）とある。

\* 類似の句が『素問』天元紀大論に「有余而往、不足随之、不足而往、有余従之、知迎知随、**氣可****与期**」とある。「有余而往、不足随之」（有余で病気が進めば、「不足する」に従う＝迎）、「不足而往、有余従之」（不足で病気が進めば、「有余する」に随う＝随）と解釈すれば、「氣可与期」は「氣は与ともに期すべし」（迎随を知りて、氣は調整を待つべし）という意味か。

粗之闇乎、妙哉工独有之、

（粗の闇きか。妙なる工 独り之を有す。）

（粗工は往・来に暗く、巧みな上工だけが往・来を知っている。）

粗工は、病期に往・来があることが分かっていない。妙なる上工だけが、往・来に明るく、よく分かっている。

\* 「妙」は、神業に近い、巧みなさま。「有」は、往・来の知識を持っていること。『老子』第1章の「常無欲、觀其妙」と関連があると思われる。

往者為逆、

(往は逆と為す)

(往期は逆証である。)

已衰期は、逆証である。逆は、調子よく進まないこと。治療がうまくいかないこと。ぶり返すことがあるので、慎重に治療し、深追いはしない。

\* 『靈枢』逆順篇「上工刺其未生者也、其次刺其未盛者也、**其次刺其已衰者也**、下工刺其方襲者也」

4 期	第 2 節	第 3 節
未生期		
未盛期		来期 (来為順)
方襲期	来期 (其来不可逢)	
已衰期	往期 (其往不可追)	往期 (往為逆)

来者為順、

(来は順と為す。)

(来期は順証である。)

未盛期は、順証である。順とは、調子よく進むこと。治療がすらすらはかどること。

\* 来期は、未盛期と方襲期に分けられるが、順証であることを考えれば、ここでは未盛期を指すと思われる。

『靈枢』逆順篇の「上工刺其未生者也、**其次刺其未盛者也**、其次刺其已衰者也、下工刺其方襲者也」

明知逆順、正行無問、

(明らかに逆順を知り、正しく行い、問うなかれ。)

(逆・順をよく知って、正しく治療せよ。考えてはならない。)

この逆証・順証をよく知ったうえで、迎法・随法を行べきで、そこに躊躇は要らない。

\* 「問」は考察すること。何かを考えると、治療のタイミングを失う。

\* 『素問』至真要大論篇に「故曰、知標與本、用之不殆、明知逆順、正行無問、此之謂也」と引用される。

\* 逆証：『靈枢』熱病篇

熱病不可刺者有九、

- 一曰、汗不出、大顴發赤、噦者死、
- 二曰、泄而腹滿甚者死、
- 三曰、目不明、熱不已者死、
- 四曰、老人嬰兒、熱而腹滿者死、
- 五曰、汗不出、嘔下血者死、
- 六曰、舌本爛、熱不已者死、
- 七曰、欬而衄、汗不出、出不至足者死、
- 八曰、髓熱者死、
- 九曰、熱而瘰者死、腰折痠癢、齒噤齩也、

### 迎而奪之、惡得無虛、

(<sup>げい</sup>迎して之を奪う。悪んぞ虚無きを得んや。)

(迎法をして、迎え撃って病邪の勢いを奪えば、かならず弱まる。)

\* 迎法は、迎撃。出迎えるように手当てすること。「未盛期」は、病気を出迎え、病勢を削ぐようにする。熱邪・大邪を除去すれば、病勢は必ず衰弱する。

\* 刺節真邪篇の熱邪・大邪を対象とするか

(鑱鍼) 凡刺熱邪、越而蒼、出遊不歸、乃無病、爲開通、辟門戶、使邪得出、病乃已、

(鈹鍼) 凡刺大邪、日以小、泄奪其有余、乃益虚、剽其通、鍼其邪、肌肉親視之、毋有反其眞、刺諸陽分肉間、

### 追而濟之、惡得無實、

(<sup>つい</sup>追して之を<sup>たす</sup>濟く。悪んぞ実無きを得んや。)

(追法して、真気を助ければ、かならず充ちてくる。)

\* 追法は、「已衰期」に、後追い(追撃)して手当てし、真気を助けて(濟)充実させる。

\* 刺節真邪篇の寒邪と小邪を対象とするか

(員利鍼) 凡刺小邪、日以大、補其不足、乃無害、視其所在、迎之界、遠近盡至、其不得外、侵而行之、乃自費、刺分肉間、

(毫鍼) 凡刺寒邪、日以温、徐往徐來、致其神、門戶已閉、氣不分、虚實得調、其氣存也、

### 迎之随之、以意和之、

(之を迎し、之に随するは、意を以て之を和せ。)

(迎法するも、追法するも、集中した意識をもって、病気を終えさせるべきである。)

\* 「随之」の本字は「追之」。

\* 「意」は、第2段に「属意病者」（意を病者に属<sup>まゐ</sup>げ）とあり、「神属勿去」（神属<sup>そそ</sup>ぎて去る勿れ）とあるところを見ると、意と神は同じと思われ、冷静な意識・研ぎ澄まされた精神を指す。意気自如（落ち着いて動じない）のことか。

\* 「和」は、平和の意。戦争のない穏やかな状態。或いは調和の意。

\* 『素問』刺真要大論

「令其調達、而致和平」

（其れ調達せしめ、而して和平を致す。）

（調整させて、和平に導く。）

\* 参考：『鬼谷子』飛箝篇「用之於人、則量智能、権材力、料氣勢、為之枢機、飛以迎之隨之、以箝和之、以意宣之、此飛箝之綴也。」

鍼道畢矣、

（鍼道 畢んぬ。）

（「鍼道」の段落はここで終わる。）

\* 「鍼道畢矣」は、篇名（段落名）が後に置かれる形式。九鍼十二原篇に「九鍼畢矣」「鍼害畢矣」「刺之道畢矣」とあり、『靈樞』官能篇に「刺道畢矣」「鍼論畢矣」、『靈樞』九鍼論に「鍼形畢矣」とある。